

である。その立場に立つ一人がジャンセニウス(一五八五—一六三八)であった。「純粹本性の状態」という近世スコラ神学の一概念は、この時代に人間がいかに理解されていたのか——人間は本質的に超越に開かれた宗教的存在なのか、それとも自然的次元に自足する存在なのか——、自然と超自然の関係性はどうのように表象されていたのか、といった問題群に関わる概念なのである。

神学的後衛としてのエルンスト・トレルチ

小柳 敦史

一九八〇年代以降、いわゆる「自由主義神学」の再評価が進み、その成果はドイツのみならずわが国でも相当程度認知されてきているように思われる。それに伴って、「自由主義神学」から「弁証法神学」への移行の過程についても見直しがなされてきた。弁証法神学と呼ばれてきた神学運動(の特に初期)の担い手について、彼らがヴァイマル期ドイツの知的世界に登場した「前衛(アヴァンギャルド)」、あるいは「前線(フロント)」「世代」の一員として、「表現主義」的な宗教的言説を展開したと理解する視点が提示されている。本発表は従来の研究を補う視点として「後衛 *arrière-garde*」という概念を紹介し、エルンスト・トレルチを例にその妥当性を検討するものである。「前衛」が元々は最前線を切り開く部隊を指し示す軍事用語であった(そして、「前線(フロント)」と実質的には同じ意味を持つ)ように、「後衛」もやはり軍事用語であり、それは「引き延ばし戦」あるいは「撤退戦」を戦う「しんがり」の部隊を

意味する。ウィリアム・マルクスやアントワヌ・コンパニオンは、早くは一九一〇年代に、主として一九三〇年以降の文学者や思想家の中に自らの立ち位置を「後衛」とみなし、「前衛」から距離をとる人々が現れることを明らかにした。その最も自覚的な姿は晩年のロラン・バルトに認められる。彼の願いは「前衛の後衛」に位置することだった。バルトは言う。「前衛であること、それは何が残ったのかを知っていることです。後衛であること、それは死んだものをなお愛することなのです」。こうして、常に新しいものを求める前衛と共に古いものの死を看取りながら、死に行くものへの愛着により、前衛とは距離を置くことになる「後衛」の姿が明らかになる。

このような「後衛」の位置に、カール・バルトら神学的前衛たちを見つめるトレルチを置くことができるだろう。若きトレルチは「宗教史学派」の一員として、神学に歴史的方法を全面的に導入することを目指す「前衛」であったが、第一次世界大戦前後の「学問における革命」のうねりを目の当たりにして、歴史的方法や学問性にこだわるのが今や時代遅れであることが自覚する。「我々の学問的営為においてはとても多くのものが生氣を失い慣習的なものになってしまっていて、世代交代は否定しようがない。しかしながら、この交代は厳密な、そして本来的に秩序あり実証的である学問との接触を再び見出すだろうし見出さなくてはならないと、私は信じ、かつ望んでいる。」(Ernst Troeltsch, *Die Revolution in der Wissenschaft*, in: *Kritische Gesamtausgabe Bd. 13, S. 561f.*) 学問の革命に対して共感を持ちつつも、実証的な学問、具体的には歴史的方法を

手放すことをトレルチは認められない。世代交代は起こり、学問は更新されなければならないが、そこには断絶ではなく接触がなくてはならないのである。自らが前衛として引き起こした戦いに今やけりをつけ、次なる前衛に知的遺産を引き継ぐと後衛戦を戦うトレルチの姿がここにある。

以上、トレルチの後衛性を確認してきたが、「後衛」という視点を導入することの本来の目的は前衛と後衛を対比することではなく、前衛という視点だけからは見えてこない繊細な歴史の流れを解きほぐすことであった。そのためには、「後衛」という視点がドイツの宗教思想史にとつても有意義なものでありうるかを、今後さらに検証していく必要があるだろうし、こうした検証により、まだ端緒についたばかりである「後衛」研究にたいして宗教思想史の側から貢献することが可能になるように思われる。

### テイリツヒの宗教社会主義思想

宮崎 直美

テイリツヒと同時代人でワイマール期の思想状況を知識社会的に分析したカール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』におけるユートピア論を用いて、テイリツヒの宗教社会主義思想をユートピア思想として読む。これにより、テイリツヒの宗教社会主義思想の社会主義思想における特徴や意義を明らかにすることを目的とする。

【社会主義の同時代的分析】マンハイムは、社会主義思想が「無制約的意識・体験」を排除して合理化を進めることによっ

て「ユートピアから科学へ」と変遷してきたと分析する。また、テイリツヒも、社会主義が「超越的領域」を失って、資本主義経済・科学・技術を中核とした無限の発展を信じる「ブルジョワ原理」を引き継いでいると指摘する。両者の議論は、同時代の社会主義の分析において、無制約的なものの消滅に力点を置いていた点で一致する。ただし、マンハイムの分析が、内在領域の社会学的分析であり無制約的体験の消滅に焦点を当てているのに対し、テイリツヒは超越的領域の不在を積極的に批判している点で両者は大きく異なる。

【テイリツヒのユートピア論】「カイロス」マンハイムの社会主義分析は、「ユートピアから科学へ」という変化を指摘するに留まっていたが、テイリツヒの宗教社会主義思想は、無制約的なものが本来社会主義思想において果たしていた役割を、社会の変革にとって必要不可欠なものとみなし、「カイロス」概念を以て、それを再び社会主義に導入し、いうなれば「科学から再びユートピアへ」という運動を目指したものであると言える。また、マンハイムの指摘によると、社会主義思想は自らの内に宿す革命の意識を排除してきた。しかし、テイリツヒのカイロス論は、千年王国を受動的に待つのではなく、カイロス意識のなかでむしろ主体的に人間が好機に対応した自由な行動を取るという、下からの契機と、上から到来する「永遠的なもの」が一致する瞬間を描いた。また、マンハイムの分析によると、社会主義は「革命的衝動」を「プロレタリアートの革命的行動」に見出し、これに対してテイリツヒは、「カイロスの意識」を「群衆 Masse」に見出し、宗教社会主義の担い